●聞くこと
英語1　音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を活用して聞く

<問題文>
レストランでの店員と客の会話を聞いて、客が注文したものを、<解答欄>の１から４までの中から１つ選びなさい。

▶ ← 再生ボタンを押してください

【レストランでの店員と客の会話】

<解答欄>

英語の音声スクリプト

店員	: Would you like some cake? We have cheesecake and chocolate cake today.
客	: Well, I love cheesecake, but I cannot eat any more food. Can I have a cup of coffee?
店員	: Of course. Any sugar and milk?
客	: Yes, please.

出題の趣旨

音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかをみる。

「聞くこと」の目標である、必要な情報を聞き取ったり、概要や要点を捉えたりするためには、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。そのためには、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことにおける実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図るとともに、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うことが求められる。

英語1では、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けているかどうかを把握するために、注文の場面での店員と客の会話を聞き、客が注文したものを選択する問題とした。

■学習指導要領における領域・内容

聞くこと

内容（1）英語の特徴やきまりに関する事項

ア　音声

ウ　語、連語及び慣用表現

エ　文、文構造及び文法事項

■評価の観点

知識・技能

１．解答類型と反応率

問題番号		解答類型		反応率（%）	正答
1		1	1 と解答しているもの	37.7	
		2	2 と解答しているもの	1.2	
		3	3 と解答しているもの	60.6	◎
		4	4 と解答しているもの	0.3	
		0	無解答	0.2	

（N= 861,464 人）

２．分析結果と課題

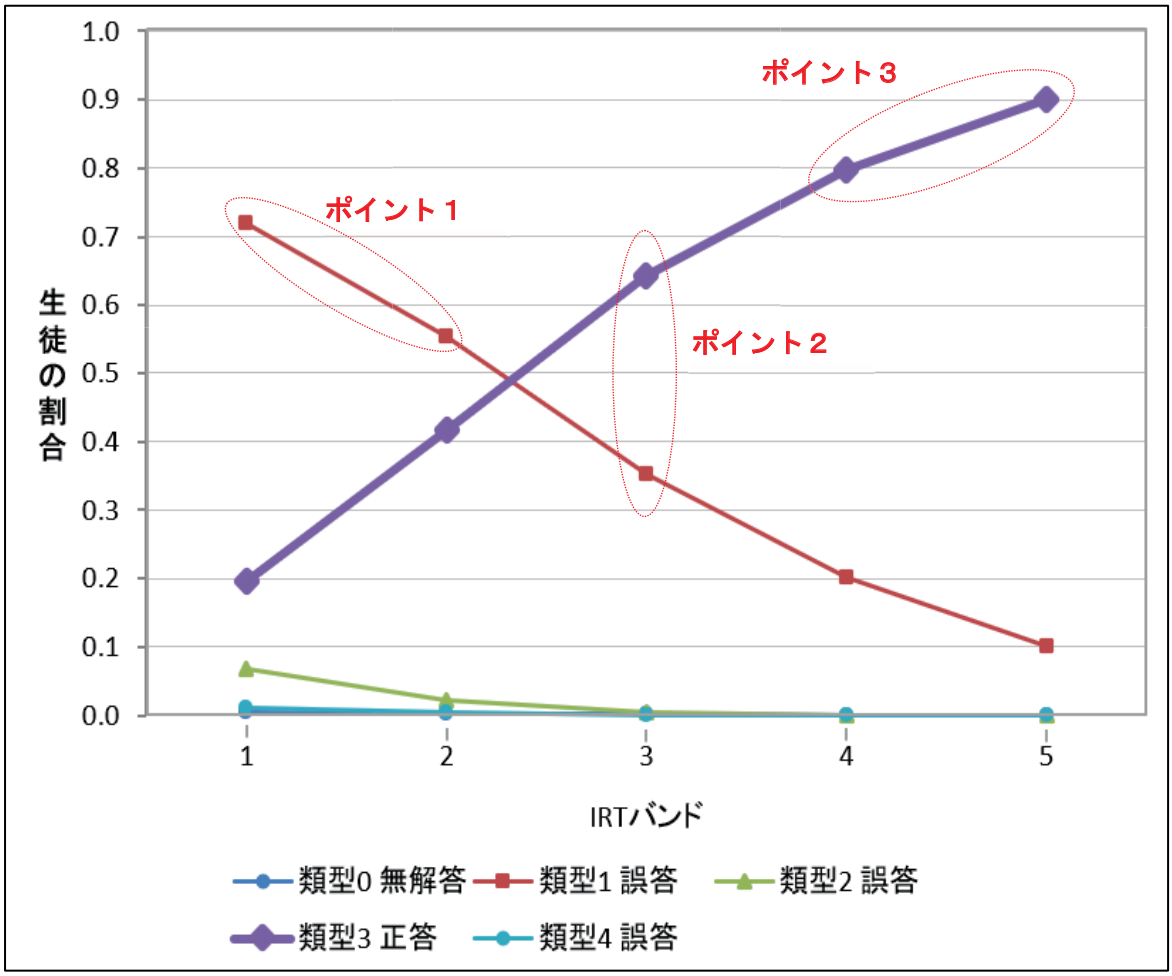
○　正答率は 60.6%である。注文の場面での店員と客の会話を聞き、客が注文したものを選択する本問では、音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を活用して聞くことはおおむねできている。解答類型２の反応率 1.2%、解答類型４の反応率 0.3%と比較すると、誤答の中では解答類型１の反応率が 37.7%と高い。

○　解答類型１に該当する生徒は、“I love cheesecake, but I cannot eat any more food.”と「チーズケーキは好きだけれど、もう食べられない」という情報を聞き、チーズケーキは注文しないということを理解することができていないと考えられる。“I love cheesecake.” を聞いて、ケーキを注文すると誤って捉えたり、“I cannot eat any more food.” を理解することができていなかったりすると考えられる。“Any sugar and milk?” “Yes, please.”というやり取りから砂糖とミルクを注文するという情報を聞き取ることはできている。

※　思考発話調査では、“I love cheesecake.” を聞いて、ケーキを注文すると誤って捉えている生徒の様子が観察できた。また、正答である解答類型３を選択している生徒の中にも、音声をすべて理解して判断しているわけではなく、“I love cheesecake.” の後の “but” のみを聞き、チーズケーキを注文しないという判断をしている生徒の様子も観察できた。

思考発話調査については、pp. 22-23 を参照

○IRT バンド別類型割合グラフ



○IRT バンド別類型割合グラフから分かること

・ポイント１について

IRT バンド１に属する生徒の７割以上、および IRT バンド２に属する生徒の５割以上が誤答である解答類型１を選択しており、聞き取ることができた語句や表現のみから判断している可能性が考えられる。指導に当たっては、聞くことの活動を意識的に行い、音声スクリプトを確認させたり、学習者用デジタル教科書を活用して速度を落として聞かせたりすることが考えられる。 【p.31「学習指導に当たって」（１）～（３）】

・ポイント２について

IRT バンド３に属する生徒の６割以上が正答である解答類型３を選択することができている。一方、３割以上が誤答である解答類型１を選択しており、特定の情報のみを聞いて解答を判断している可能性が考えられる。指導に当たっては、前後の情報も合わせて判断する必要がある英語の音声を聞かせ、キーワードとなる箇所を丁寧に指導することなどが考えられる。 【p.31「学習指導に当たって」（４）】

・ポイント３について

IRT バンド４に属する生徒の約８割、IRT バンド５に属する生徒の約９割が、正答である解答類型３を選択しており、相当数の生徒が、注文の場面での店員と客の会話を聞き、客が注文したものを聞き取ることができていると考えられる。

IRT バンド別類型割合グラフから分かることを考える　その１

１．自校の IRT バンドの分布を確認する　※教師Ａ～Ｄは同じ中学校の同僚を想定している

教師 A

本校の IRT バンドの分布は図Ⅰのようになっています。

教師 B

IRT バンド2や3に属する生徒の割合が高いですね。

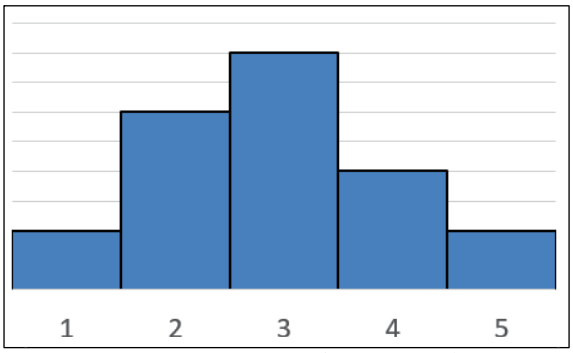
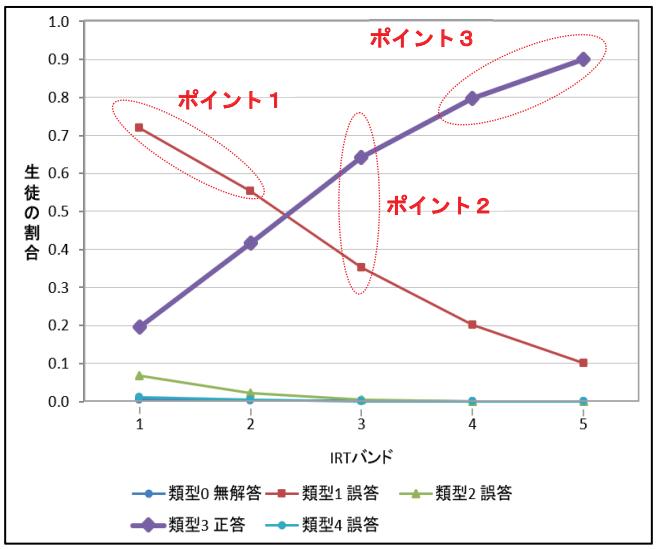


図１　Ｙ中学校の IRT バンドの分布

２．報告書より全国的な傾向を確認する

教師 C

報告書では、全国的な傾向は次のように示されています。



店員	Would you like some cake? We have cheesecake and chocolate cake today.
客	Well, I love cheesecake, but I cannot eat any more food. Can I have a cup of coffee?
店員	Of course. Any sugar and milk?
客	Yes, please.

英語1　音声スクリプト

教師 D

IRT バンドⅠに属する生徒の7割以上、および IRT バンド2に属する生徒の5割以上が、誤答である解答類型Ⅰを選択していて、客が注文したものを聞き取ることに課題があります（ポイントⅠ）。IRT バンド4、5に属する生徒は、正答である解答類型3を選択することができています（ポイント3）。IRT バンド2や3に属する生徒が多い本校では、どのような授業改善が必要でしょうか。

IRT バンド3に属する生徒は、6 割以上が、客が注文したものを聞き取ることができていますが、3割以上が誤答である解答類型Ⅰを選択していることに留意して指導する必要がありそうです（ポイント2）。

３．全国的な傾向と自校の IRT バンドの分布を見て、指導の改善を考える

IRT バンド3～5の生徒でも、誤答である解答類型 I を選択していることを踏まえて、授業改善を図ることが大切ですね。なぜ解答類型 I を選択してしまうのでしょう…。

ミルクと砂糖を注文することは聞き取れています。しかし、“I love cheesecake.” を聞いて、ケーキを注文すると誤って捉えたり、“I cannot eat any more food.” を理解できていなかったりするのではないでしょうか。

生徒

どのように聞き取っているか、私が担当している生徒に聞いてみると、正答できている生徒でも“I love cheesecake.”のあとの、“but”のみを聞いてチーズケーキを注文しないと判断し、その後の“I cannot eat any more food.”は、音声を聞き取ることができなかったり、音声は聞き取れたけれど意味が理解できなかったりしたそうです。

どうやって「3」と判断したの？

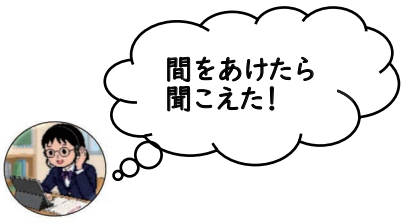
but が聞こえたので…

生徒

“but” のみではなく、最後まで聞いて判断できるように指導することが大切ですね。IRT バンド3の割合が高い本校の場合には、聞くことの指導を丁寧に行う必要がありそうです。

報告書の「学習指導に当たって」には、「特定の情報のみを聞くのではなく、前後の情報も合わせて聞き取らせる」とありました。正答できたから聞き取れている、と捉えるのではなく、音声を聞いて判断しているか確認することが大切ですね。
IRT バンド２に属する生徒にはどのような指導が考えられるでしょうか。

学習者用デジタル教科書を使うと、次のような活動に、生徒が自分のペースで取り組むことができそうです。
①音の変化に着目して特定の箇所を聞く
②速度を落として聞く
③繰り返し聞く
④文と文の間にポーズを置いて聞く など



IRT バンド2に属する生徒の割合が高い本校では、有効な手立てになりそうです。それでも聞くことに難しさを感じる生徒がいる場合には、音声スクリプトを活用して、分からなかった箇所を各自で確認することもできそうです。IRT バンド別類型割合グラフから、生徒の状況を詳しく知り、それぞれの解答類型に対応した授業改善を図ることにつながりそうです。

このように、他の問題についても IRT バンド別類型割合グラフから生徒の学習の状況を把握し、授業改善の糸口を探ってみましょう。

３．学習指導に当たって

（１）聞くことの活動を意識的に行う

情報を聞き取ることができるようにするためには、授業の指導過程の中で、聞くことを通して理解する活動を繰り返し行うことが重要である。例えば、学習者用デジタル教科書の活用のほか、教師による最近の出来事についての話や、外国語指導助手（以降、ALT）などによる簡単なスピーチを聞く活動などが考えられる。このような活動を行うことによって、なるべく自然な口調で話される音声に触れさせ、慣れさせることが大切である。

情報を聞き取ることに難しさがある場合、抱えている課題が「知識」の側面なのか、「技能」の側面なのかを把握し、個々の課題に応じた支援が大切である。例えば、ゆっくりと話された音声であっても聞き取ることができない場合には、「知識」の側面に課題がある可能性がある。一方、ゆっくりと話された音声であれば聞き取ることができる場合には、自然な速さや口調で話された音声を聞き取ることに課題があるなど「技能」の側面に課題がある可能性がある。

（２）音声スクリプトを活用する

「知識」の側面に課題があると考えられる場合には、音声スクリプトを提示し、話された内容における語彙や表現、文法などを理解することができなかった箇所を各自で確認する機会を設ける。その後、書かれている内容の意味を理解するように指導したり、音の変化に着目して特定の箇所を聞かせたりすることが考えられる。音声スクリプトで話された内容を確認した後で、再度、音声のみで聞き、聞き取れなかった箇所を聞き取ることができるように指導することが大切である。

（３）学習者用デジタル教科書などを活用しながら、「聞くこと」の活動を繰り返し行う

「技能」の側面に課題があると考えられる場合には、学習者用デジタル教科書などを活用して、①音の変化に着目して特定の箇所を聞く、②速度を落として聞く、③繰り返し聞く、④文と文の間にポーズを置いて聞く、などの活動を行い、標準的な発音や語と語の連結による音の変化、抑揚やリズムなどの英語の音の特徴を具体的に指導することが考えられる。活動後には、再度、元の速度で話された音声を聞かせ、生徒が活動前と比較して聞き取ることができるようになった実感をもたせることが大切である。複数の単元を通して、生徒が①～④などの活動を行い、その後の単元や家庭学習では、生徒が自分に合った聞き方を選択できるようにすることも考えられる。

（４）特定の情報のみを聞くのではなく、前後の情報も合わせて聞き取らせる

音声を聞き、話された内容を理解するためには、特定の情報のみを聞いて判断したり推測したりするのではなく、その前後の情報も合わせて聞き取らせることが大切である。例えば、英語1においては、“I love cheese cake” を聞いて、チーズケーキを注文すると判断したと考えられる解答がみられたが、その後の男性客の “but I cannot eat any more food.” までを聞き、食べ物を勧められた男性客が、チーズケーキを注文しないことを理解する必要がある。“cannot eat” “any more food” など、キーワードとなる箇所を丁寧に指導することも大切である。

（５）学習活動の例

- 自然な速さで話される音声を聞いて、語と語の連結による音の変化や強勢による英語特有のリズム、イントネーションに慣れる活動
- 聞いた音声を、意味を考えながら話された通りに話したり書いたりして、自分で英文を組み立てる活動

コラム①

【知識及び技能の指導】

外国語科において身に付けるべき「知識及び技能」の資質・能力に関して、英語の特徴やきまりに関する事項として示される「音声」、「符号」、「語、連語及び慣用表現」及び「文、文構造及び文法事項」を扱うこととされています。これらの英語の特徴やきまりが実際のコミュニケーションにおいて活用される際には、言語の働きと関連付けることが重要です。例えば、「慣用表現 “Excuse me.” は『話し掛ける』、『呼び掛ける』、『謝る』などの言語の働きを示すために用いられる」、「助動詞 “can” は『許可』や『依頼』などの言語の働きを示すために用いられる」というような使い方についても指導するようにします。本調査の英語 15 （２）a では、明日留学生のサラと行うことについての考えや意図を述べることが求められています。未来の表現を用いて考えや意図を表現したり、“Let’s …” や “Why don’t you …?” などを用いて提案したりできるようにすることが必要です。

また、これらの個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼を置くのではなく、主体的に運用する技能が習熟・熟達することを目指して指導すること、つまり、知識の獲得にとどまるのではなく、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことという言語使用の際に活用できるようにすることが重要です。聞くことを指導する際には、語、文構造や文法事項等の知識だけではなく、どのように聞こえるのかという音声の指導が必要になります。“such as” という連語の知識があったとしても、連結という音の変化があった場合、聞き取れるとは限りません。既習の英語の特徴やきまりに関する事項を聞くことを繰り返す中で、聞くことの技能が習熟・熟達していきます。読むこと、話すこと、書くことについても同様です。

「知識及び技能」の指導に当たっては、「気付く」、「整理する」、「記憶する」、「使う」活動を適宜行うことが大切です。第１に、英語の特徴やきまりに関する事項に気付く機会を多く設けることです。新出の事項については、意味（どのような意味なのか）、言語形式（どのように発音するか、どのように綴るか、どのような語順なのか、どのような規則なのか、など）、使い方（どのような言語の働きを示すために使われるか、いつ使えるか、他の事項との違いは何か、など）について気付きを促すようにします。既出の事項であっても、気付きは重要な学びのプロセスになります。語であれば、聞いたり読んだりする中で、多様な語との組み合わせが用いられることに気付くことによって、語に関する深い知識を得ることができます。例えば、動詞 “wear” の意味が「着る」という意味で用いることを学んだ生徒が、聞いたり読んだりする中で、衣服だけでなく、“shoes” や “a pair of glasses” といった語や語句と組み合わせられることを学ぶことができます。また、文構造や文法事項がどのような言語の働きと関連して用いられているのかに関しても、聞いたり読んだりする中で気付くことによって学びを深めていくことができます。

第２に、文構造や文法事項等を整理する際には、既出の表現との意味、言語形式、使い方の違いを意識させることが大切です。中学校学習指導要領では、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとめて整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること。」とされています。例えば、明日行うことに関する考えや意図を伝える表現について、“will” “let’s”

“I want to” などの表現を用いることが可能ですが、それぞれどのような違いがあるのかを整理することが考えられます。言語使用の際に、どの表現を用いたらよいかという判断の一助となります。

第３に、英語の特徴やきまりに関する事項を記憶する際には繰り返しが重要です。時間が経てば、忘れていくものです。集中的に覚える努力をしたり、時間を空けながら記憶を確認したりすることが効果的です。その際、闇雲に記憶させるのではなく、言語活動と関連させて、何のために記憶するのかを示すことが重要です。例えば、あるトピックに関してやり取りをするという言語活動を行うために、そのトピックに関する複数の語を覚えようと意識づけます。「話すこと［やり取り］」の言語活動なので、語の発音を聞いてすぐに意味を理解したり、その意味を伝えたいと思った時にすぐに語を想起したりできるようにすることを意識して、語を覚える活動を設定していきましょう。

第４に、技能の習熟・熟達のためには、言語活動の中で、既出の英語の特徴やきまりに関する事項を繰り返し活用する機会を設けるようにしましょう。例えば、過去形を中学１年生で学んだとします。その後、新たな文構造や文法事項等を扱う際、過去形を使う機会がなければ、実際のコミュニケーションにおいて過去形を活用する技能の習熟・熟達は望めないでしょう。言語活動の中で、既出の英語の特徴やきまりに関する事項を駆使するように促し、適宜、正しい言語形式や使い方について指導しましょう。